

45年前の酪農経営

町村氏は八雲の農民に何を教えたか！—その2—

八雲町 太田正治

デントコーン

その早生種を選ぶ理由

今、我々を案内してくれる町村氏は、理想主義者でも詩人でもない。すべての作物に対する実に熱心、綿密、周到な实际的技術家である町村氏は、どんな質問に対しても体験から出た確信を持って、力強く答える。

町村氏の作っている10数haのデントコーンの大部分はウィスコンシン12号、一部はミネソタ13号、エローで、我々が八雲で栽培しているエローよりも一層早生のものである(八雲では、まだ、あの極晩生のホワイトを作っている者が相当いる)。これはエローよりも草丈が低いし、従って収量は少ないが、実は十分につく。しかも、これを5月15日ころに播種するというのである。

どうして収量の少ないこれらの品種を選ぶか。それは第1に、この品種は実が多いから、従って栄養が多い。第2に、この品種だと9月15日ころから切込みが出来るので、早く切込みを終って耕地の秋耕をすることが出来る(町村氏は、「春の仕事の4割は、秋のうちにやっておかねばならぬ。云々」と、耕地の大部分を秋耕する。これは、非常に多忙な春季の労力を大いに調節する)。第3に、種子が採れる。

コーンはよく揃って出来ていた。町村氏のデントコーン畑は、畦幅90cm、株間も優に60cmはあろう(2本立)。だから、コーン畑の端も真中も同じように十分に光線が入る。コーンは太く短く、必ず1本ないし2本の実をつけ、下葉まで濃緑である。このデントコーンのサイレージと野田生あたりで未だにやっているホワイトデントコーンを密播したサイレージとでは、すべての状態が全然

違うことはちょっと考えてもわかる。

コーンに青刈大豆間作及び

クローバを加えて切込むこと

コーン畑には全部、青刈大豆が株間に間作してあって、地面が見えないほど良く伸びている。もちろん、これはコーンといっしょに切込むのであるが、更に僕たちを驚かせたのは、クローバをも同時に切込むことだ。今年、エンバクと混播したクローバが切込みころまでには伸びるから、それを刈って、コーンとクローバと大豆との3種の植物のサイレージを作るのである。

町村氏は言う。「普通のサイレージは、蛋白質は1.5%くらいのものですが、私はこれを3%にしたと思っています。それは、大豆やクローバを混ぜることによって十分に可能です。このころ、加酸サイレージの研究が行われているが、あれは、ビルターネンの考えたA. I. V. 液^{エーアイブイ}という液を作る工場が出来なければうまくいきません。が、コーンの中へ、大豆やクローバを混ぜることは、コーンの乳酸がこのマメ科植物に作用して、りっぱな加酸サイレージの作用をするわけです。

早生種コーンの収量の少ないのは、大豆15%、クローバ15%を加えて補い、更に総体において倍の栄養分を得ようというのです。こうした苦心は、みな、家畜に少しでもうまいものを与えたい…つまり家畜が可愛い^{かわい}からのことです。」

トウモロコシを殿とする

青刈飼料連続給与

家畜を舎飼いする場合、青刈飼料の連続給与には、誰でも苦心する。

町村氏のやっておられるのは、だいたい次図のような方法で、主としてアルファルファを含めた

4月	5 15	5 10 20 6	10 30 7	8 20	10 9
冬季飼料 サイレージ 根菜	ナタネ	オーチャードグラス } クローバ } アルファルファ } 1番	クローバ } エンバク } エンドウ } 2番	オーチャードグラス 2番 クローバ } アルファルファ } 2番	フリントコーン デントコーン チモシー } クローバ }

図 青刈飼料連続給与

牧草の青刈であるが、最初のナタネと、7月10日ころのエンバク、エンドウ等の混播と、最後のトウモロコシ（フリントコーン）の青刈は大いに参考となるであろう。トウモロコシの青刈は非常に乳量を増す。人の食用を少し多目に作って牛に与えるのだ。これらの工夫も、どうにか夏中家畜を飢餓から救うためのものでなく、家畜に出来るだけ栄養のある新鮮な、その時節時節のものを給与しようとするためのものであることは言うまでもない。飼主の都合で家畜に忍従させるのではなく、家畜を満足させるために、飼主が工夫し、努力するのである。

こうした青刈飼料をいろいろ工夫して飽食させているときにおいても、コーンのサイレージを毎日7.5kgぐらい絶え間なくやっている。僕たちは、9月8日に、一昨年切込んだサイレージを与えている事実を目撃した。

ついでに町村氏のサイレージ給与量を記しておこう。

	サイレージ	その他
夏季間	7.5kg	牧草青刈（飽食）
冬季間	19.0	根菜類37.5kg+乾草7.5kg

7年目にアルファルファが出来るようになった話

アルファルファの3番草が45cm以上に勢よく伸びているのを見せられた。

「私は7年前からアルファルファを作りたいと思って苦心しましたが、どうもうまく育ちませんでした。し

かし、もう大丈夫です。このごろようやく自信が出来ました。」

全くこれなら、もう大丈夫に違いない。アルファルファはクローバの2倍以上の蛋白を含有するし、その乾草は濃厚飼料に近いもので、乳牛のためには、正に牧草中の王様である。

町村氏は、将来、このアルファルファを増やし、チモシーを減らして、冬季間の乾草はアルファルファとクローバのみにしたい考えを持っている。

八雲の我々は、今ようやく覚醒してクローバを作ろうと考えているのだが、氏は既に数段上を歩いている。だが我々は、町村氏がどんなに苦心努力を続けて、あの瘠薄な土地を改良し、最も至難とされているアルファルファが、このようにりっぱに伸びるまでにしたかを思わなくてはならないと思う。

× × ×

この肥料の表は、町村農場研究上興味ある資料である。これで見ると、町村氏は莫大な自給肥料（堆肥、尿）と非常に少ない購入肥料を用いておられることが明らかである。

諸君のうちに、バレイショを過リン酸石灰30kgだけで作ろうと考えたものがあるか！ また、過リン酸石灰15kgと硫酸7.5kgとで気に入るよう

表 これらの作物に施された肥料

作物名	面積 ha	自給肥料		化学肥料				収量 (t/10a)
		堆肥	尿	過石	硫酸	カリ	石灰	
エンバク	6.0			kg 37.5	kg 30	kg	kg	
バレイショ	0.6	◎						
アマ	0.5							
トウモロコシ	1.0	◎		15	7.5			
飼料用ビート	3.0	◎		22.5	11.25	7.5	750	7.5~9.4
デントコーン	13.0	◎		15	7.5			3.0(サイレージ)
乾牧草	14.0		◎	37.5				1.1
青刈牧草	8.0		◎	37.5				
アルファルファ	2.0		◎	37.5				

注) ◎印：自給肥料施用畑

なデントコーンを作り得る自信のある者があるか。更にまた、この20数haの牧草地に、少しの窒素質化学肥料を用いることなく過石37.5kgのみで純良な乾牧草10a当り平均1,050kgを得ている事実は、実に驚くのほかはあるまい。

これは、今更説明するまでもなく、10年間町村氏が営々建設した土地なるが故なのである。石灰、排水、堆肥、深耕、それに牧草の輪作—これを10年間継続すれば、^{さばく}砂漠も変じてサフランの花かおる沃土と化することが出来るのである。

試みに、この肥料を集計してみると、

過石(37.5kg入)	379袋	1,043.50円
硫安(〃)	37〃	150.20〃
カリ(〃)	6〃	40.80〃
計	422〃	1,234.50〃

以上のごとく、一番安い過石が量において全肥料の9割を占めており、残りの1割(金額にして190円余)だけが窒素及びカリ肥料である。総金額1,234円50銭を50haに割当てると、10a当り2円50銭に達しない。かくのごとき少量の金肥は全く補助として施されるので、町村氏の肥料の基礎は、100頭の家畜から毎日莫大に排泄される糞尿であることは言うまでもない。

	毎年施される面積	作物	全耕地に対する割合
堆肥(厩肥)	17ha	コーン及び根菜類	33%
尿	24	牧草及アルファルファ	50%

暗渠排水の効果

町村氏の耕地は小波状地で、諸所に凹状の低湿地がある。以前は、このような低地は水が湧き、馬を入れることが困難だったそうであるが、現在では、それが全部排水され、コーンでも牧草でも、かえってこういう凹地の方が良く伸びている。それは、全部土管暗渠排水の施設が行われているからである。この農場の総収量が多いのは、こうした普通ではほとんど耕作不能のような所をも生かしていることにもよるのである。実際、町村氏の畑には、ここは湿地だからとか、ここは傾斜地だからとか、なんとか言って、申し訳をしなければならぬような作物はいくら探しても見あたらない。平均によく出来ている。

町村氏は、暗渠排水の効果をいろいろ説明された。これを実施すると、表面の水が土管へ流れ込

むから、自然にその水路が出来、この水路を追って空気も土地深く侵入することになり、低地のバクテリアがよく活動して、肥料分を十分に分解し、自然に土地を低部まで軟らかくする。また、これは逆に、干ばつにも効果がある。それは、土地の理学的性質が良くなり、地下水を毛管引力で引上げるからである。更にまた、融雪直後に馬耕を始めて春の作業を進捗させるためには、この暗渠排水は大きい役割を演ずるのである。

町村氏は、10年間、毎年この暗渠排水工事を続けておられる。今日もなお、1mぐらい掘り下げて土管を敷設しかけている個所のあるのを見だし、町村氏の宅地内には、長さ30cm、径9cmの素焼土管が山と積んであった。

生きている耕地は

生長する

50haの耕地をくまなく巡った。全くすばらしい畑だ。

この肥料分の少ない、細かい火山灰の粘土化したような土が、こんなりっぱな耕地になるまでには、確かに経営者の施設が良かったからである。がしかし、町村氏がいかに排水を完成し、機械を駆使したとしても、もし酪農という、新しい農法を、ここに採用されるのでなかったならば、とうていこの成績はあげられるものではなかったと思う。

この広い耕地は、彼方に見える畜舎、そのサイロ、その堆肥場、その尿タンクと結びついて、あたかも心臓から送られる血液のように、あちらの建物から規則正しく送られる栄養物は、この50haの耕地のすみずみまで十分に送られるほど豊富であって、それが鋤きこまれ、生産されるすべての植物は、また規則正しく収穫されて、再びあちらの建物へ帰って行くのである。ここに一つの見事な、壮大な循環行程がある。賢明な管理者は、この循環をますます旺盛にすべく、あらゆる障害を排除するための工夫や、労苦を惜しまない。石灰しかり。排水法しかり。秋耕・深耕皆しかり。かくして、この実にすばらしい生きた耕地は、年々歳々、一層その活動力を増大していくのである。

畑の中で、こんな考えにふけっていると、もう夕方になってしまった。

成功した 50 ha の経営者と

5 ha のやせ地の経営者との会話

階下の客間が食堂にあてられた。夕食は夫人の心づくしの酪農食である。酪農食と言っても、酪連のとは違う。こちらは鶏卵と鶏肉とが豊富に用いてある。なんとという料理だか聴きたかったが遠慮した。とにかく、誠に心のこもったおいしいものだった。

「主人は、札幌のグランドホテルの料理よりも、家で作りましたものの方がおいしいとよく申します」

これが町村夫人の実にあけっ放しの朗かなお話である。さもあろう。美しい油絵のかかった、天井の白く高い、清潔な部屋、真白なテーブルかけ、軟らかく深い椅子、自分の農場で生産された新鮮な料理、健康聡明そして活動的な夫人のサービス…楽しみをほかに求める要があるだろうか。

そこでまた、町村氏を中心として、酪農談がひとしきりはずむのである。

どうしてやせ切った

土地を肥すか

「土地を肥すには、その農場の外から何ものかを持って来て、その土地に加えることが原則的に必要だという意見には同感だ。自給自足では、結局、辛うじて、現状維持を続けるほかにあるまい。飼料として家畜を通じて土地に入れるのが酪農の定石ではあるが、更にその以前に、先ず金肥を直接畑に施して、最初に出来るだけ多くの飼料を得るという方法も「無」から出発する場合の一手段であろう。酪農への方向さえ確立して迷うことがなければ、あらゆる手段を講じ、努力して早く軌道に乗せるのである」

現在、八雲あたりでは、農家は非常に忙し過ぎる。特に女性は過労だ。この傾向は、事変この方一層はげしくなっていくようだが、これは大問題だ。

日曜には、必ず作業を休んで、夫婦そろって教会へ行くという、デンマークの農民の話を聞いたが、北海道の農民には、なぜそれが出来ないか。

それは、八雲ばかりでなく、どこでも痛感している問題だ。

欧州でもそうであろうか？

米国あたりでは、農業そのものが早くから、その国民性に合った一つの型に出来上っている。ある適当な面積の土地、家畜頭数、農具、作物の種類、収入額…更に各々にふさわしい生活様式等はだいたいきまっているのです、その目標に一度到達すれば、それ以上望むことなく、その生活を楽しむのである。ただその生活が低下しないように維持していけばよいのだから、心から、体にも暇が出来る。

日本の農民にはそれがない。無方針にただがむしゃらに働くのである。これは、我々の先祖が誤ったやり方をしたので、それで我々が急に直すことが出来ないのである。

我々は、今、新しい農業方針を定めて、その目標に向かって一路建設途上にある。その建設が完成するまでは、どうも忙しいのはやむをえない。第一に、土地を建設しなければならぬ。我々の望みどおり土地が働いてくれるようになれば、我々の労力は大いに緩和される。これは根本問題である。このためには、排水の問題も石灰の問題もある。道庁も考え直して、この根本の仕事に力を尽くすべきだ。

S 部落の Y 君。「私は、もう大丈夫だ、との信念を得ました。もう大丈夫です。現在の私の土地は極端にやせていますので、草が伸びません。2、3頭の牛を繋牧する場所も次第になくなりますので、今日は牛をどこへ出そうかということが毎朝の悩みです。そのことで、牛舎の入口で家内と議論をしなければならぬという始末です。しかし、もう少しです。私は、あくまで積極的に、このやせ地改良に努力する考えです。」

最近、5 ha のやせきった土地へ入って苦心惨胆している Y 君と、50 ha の大酪農家町村氏との差はあまりにも大きいですが、しかも今夜こうして話し合う二人には、そのハンディキャップは忘れられている。我も彼も一人の酪農家であり、真剣な生活者である点では、全く心をついにし得たのである。

それにしても、僕達は、あくまで謙遜な町村氏の人格に、頭が下がった。(つづく)

(編者注)

本稿は、「酪農」誌、第 89、90 号(昭 15)による。